

あとがき

本書は、わたしが『レギュラシオンの政治経済学』(1996)を公刊して以来書きつづってきたモノグラフを「現代国家論の展開」および「労働—福祉ネクサス」というテーマに即して再構成したものである。世紀の転換を挟む激動のこの間のわたしの研究関心は、グローバル化とポスト工業化という文脈において国家の形態と国家介入の変容をレギュラシオン理論の観点から追跡することであった。

第1部では、レギュラシオン学派の国家論、とくに、「制度化された妥協」(ドホルム、アンドレ)や「調整のアルケタイプ」(リピエッツ)、「社会的レギュラシオン」(テレ)という概念にもとづいて、国家介入の変容、およびケインズ主義的福祉国家の展開と危機が議論されている。第2部では、ホール/ソスキスの影響を受けて、資本主義の多様性論と比較制度分析がレギュラシオン学派の中心的研究テーマになるなかで、新自由主義による国家介入の形態と新自由主義を超える国家介入のあり方の研究が希薄になっている現状を意識して、「国民国家の限界」、「新自由主義的競争国家」(法的介入による競争秩序の構築)、「社会的投資国家」、「環境国家」(主権の緑化)といった論点が展開されている。第3部では、安孫子誠男が提唱された、労働市場の制度・政策と福祉国家の再編を関連させて研究する労働—福祉ネクサスの視点から、新自由主義的労働市場・福祉国家改革への対抗軸として、フレキシキュリティ、デンマーク・モデル、移動的労働市場論が検討され、賃金労働社会に代わるオルタナティブな社会としての「選択可能な社会」に希望が託されている。

本書の構想が生まれこの本の執筆を思い立ったのは、今年の夏に論文「新自由主義と国家介入の再定義」(本書第6章)を書き上げたときである。本書を仕上げるために旧論文を修正・加筆したり、新しい論文を執筆したりしたこの1年を通して、シニア世代に入ってから刊行するこの著書がいくつかの長年にわたる知的・精神的な絆と交流に支えられていることを自覚させられた。

ひとつの知的絆は名古屋大学大学院時代の恩師である平田清明先生のもとでマルクスと市民社会論を学び、その後さまざまな専攻領域で活躍されている先輩・同窓・後輩の方々、山田鋭夫氏(レギュラシオン理論)、安藤金男(ワルラス研究)、千賀重義氏(リカードウ研究)、野沢敏治氏(スミス研究)、斉藤日出治氏(現代市民社会論)、篠田武司氏(スウェーデン・モデル研究)、安孫子誠男氏(比較資本主義分析)、浅野清氏(ルソー研究)、八木紀一郎氏(オーストリア学派研究)、工藤秀明氏(環境経済学)、伊藤正純氏(教育政策)、佐藤滋正氏(リカードウ研究)、佐々木政憲氏(市民社会論)、平野泰朗氏(フランス社会保障論)、井上泰夫氏(レギュラシオン理論)、植村邦彦氏(マルクス研究)との交流である。この四半世紀の間における議論、交換しあった論文・著書・訳本の数は膨大(本書の参考文献を見れば一目瞭然)である。本書ではとくに、篠田氏から「選択可能な社会」、安孫子氏から「労働—福祉ネクサス」を継承している。

もうひとつの交流は、フランスに生まれ山田鋭夫氏をリーダーとして日本に根づいて独

自の発展をとげているレギュラシオン学派の方々（第 1 世代に限ると、山田鋭夫氏、井上泰夫氏、平野泰朗氏、花田昌宣氏、宇仁宏幸氏、清水耕一氏、海老塚明氏、植村博恭氏、磯谷明德氏、遠山弘徳氏、坂口明義氏、鍋島直樹氏、中原隆幸氏）との絆であって、各種の研究会や学会の報告や討論を通して、また論文や訳書の交換を通して、最新の研究成果を享受することができた。日本のレギュラシオン学派におけるわたしのポジションは、エコロジストでもあるリピエッツの主張（『勇氣ある選択』）と初期のアグリエッタの主張（『資本主義の調整と危機』）を継承して、現代資本主義における国家—経済関係および人間—自然関係に含まれる緊張とその調整様式の研究に焦点を当て、レギュラシオンの概念のなかに政策的規範的要素を取り入れようとするものである。このポジションからの研究がどれだけ日本のレギュラシオン学派の研究に貢献できたかは心もとないが、わたしの研究がこの学派の研究成果に多くを負っているのは確かである。

本書は科学研究費（平成 23—25 年度基盤研究 C 研究代表者：若森章孝）による助成研究「フレキシキュリティの多様性とデンマーク・モデル」（研究課題番号 23530235）の研究成果の一部である。本書の第 3 部のフレキシキュリティと移動的労働市場についての分析は、この科研費によるフレキシキュリティ研究会に参加されている方々、篠田武司（立命館大学産業社会学部）、安孫子誠男（千葉大学法経学部）、水野有香（名古屋経済大学）、巖成男（福島大学経済学部）、嶋内健（立命館大学産業社会学部）との議論にも助けられている。

最後になったが、本書の素材となった旧論文と最近執筆した原稿のすべてを読み、できるだけ明確で理解しやすい文章に直すために全力を注いでくれた人生の伴侶、若森文子に感謝の意を表したい。彼女の支援がなければ、この本は刊行をむかえることはなかったと思っている。また、晃洋書房編集部の丸井氏はこの 10 年ほどのあいだわたしと適度な距離をとって著作の刊行をプッシュされ、本書の原稿がそろると、刊行への支援を惜しまれなかった。記して謝意を表したい。

2013 年 5 月 25 日

千里山の研究室で

若森章孝

初出一覧

序章

「21 世紀資本主義の調整と対立軸」『龍谷大学経済学論集』第 51 巻第 4 号,2012 年 2 月を加筆修正。

第 1 章

「市場経済と国家——自由・統治・勤労」関西大学『経済論集』第50巻第3号,2000年12月を加筆修正。

第2章

「フォーダイズム・ポストフォーダイズム・女性労働」久場嬉子編著『経済学とジェンダー』明石書店,2002年3月を加筆修正。

第3章

「福祉国家は超えられるか」八木紀一郎他編著『復権する市民社会論』日本経済評論社,1998年8月を加筆修正

第4章

「21世紀国家論の焦点と国民国家のゆくえ」『経済理論学会年報』第40集,2003年9月と、「多元的経済社会の可能性」森岡孝二ほか編『21世紀の経済社会を構想する』桜井書店,2001年5月を加筆修正。

第5章

「新自由主義と国家介入の再定義」『千葉大学経済研究』第27巻第2・3号,2012年12月を加筆修正。

第6章

「新しい社会的リスクと社会的投資国家」関西大学『経済論集』第63巻第1号,2013年

第7章

「食と生物多様性の危機」・「人と環境をつなぐ地球市民」若森章孝編著『食と環境』晃洋書房,2008年7月を加筆修正。

第8章

「資産形成成長体制の出現と新しい調整様式の創出」M・アグリエッタ／B・ジェソップほか『金融資本主義を超えて』若森章孝／斉藤日出治訳,2009年4月と、「グローバル化時代のレギュレーション理論」『神奈川大学評論』第30号,1998年8月を加筆修正。

第9章

「フレキシキュリティ論争とデンマーク・モデル」関西大学『経済論集』第59巻第1号,2009年6月と、「フレキシキュリティとデンマーク・モデル」安孫子誠男／水島治郎編著『労働——公共性と労働——福祉ネクサス』勁草書房,2010年5月を加筆修正。

第10章

「欧州経済危機とフレキシキュリティ——デンマーク・モデルのストレステスト」『経済理論』第49巻第4号,2013年1月を加筆修正。